

古墳の他界観

The Concept of the Other World in Kofun

和田晴吾

WADA Seigo

はじめに

①古墳の築造と埋葬の手順

②宗教的側面における古墳の二つの性格

③古墳と船

④他界と横穴式石室

おわりに

【論文要旨】

古墳での人の行為を復元し、遺構や遺物を検討することで、前・中期の古墳を、遺体を密封する墓としての性格と、「他界の擬えもの」としての性格の、二つの面から捉えようと試みた。

この段階では、人は死ぬと魂は船に乗って他界へと赴くとされたが、遺体は棺・槨内に密封され、そのなかで生前のような生活を送るとは考えられなかった。奈良県栗山古墳で発見された船は、実際の葬送の折に、魂が他界へと旅立つ様子を現実の世界で再現するためのものだった。

他界の内容は、船に乗って他界へと至った死者の魂は、くびれ部の出入口で船を降り(船形埴輪)、襖をし(円形埴輪)、斜面を登った岩山の頂上の防御堅固で威儀を正した居館に棲むが、そこは飲食物に満ち、日々新たな食物が供えられるといったものだった。葺石や埴輪や食物形土製品は他界を演出するための舞台装置や道具立てで、中期中・後葉には、これに人物・動物埴輪が加わった。

しかし、横穴式石室が採用されると地域差が顕在化する。後期に石室が普及した畿内では、石室は「閉ざされた棺」を納める「閉ざされた石室」で、遺体は、前代同様、棺内に密封され、玄室内は死者の空間とはならなかった。墳丘に人が登らなくなり、舞台装置や道具立ては形骸化しただしたが、古墳は「他界の擬えもの」として存続し、石室は「槨」的な性格を受けついで。

一方、中期に石室が採用されだす九州北・中部では、石室は「開かれた棺」を備える「開かれた石室」で、そこは死者が生前と同じような生活を続ける空間となった。その場合、家形埴輪とは別に死者の棲む家が用意されるが、玄室の天井が天空を表しそのなかに家形の施設を配する場合と、玄室空間そのものを死者の宿る家とする場合とがあった。『古事記』の黄泉国訪問譚の舞台は前者にあたる。ここでは、墳丘上の他界と、石室内部の他界の、二つの性格の異なる他界が入れ子状態で共存した。このような棺や石室の系譜は、中国の北朝や高句麗の一部に求めることができる。

【キーワード】古墳, 他界, 船, 堅穴式石槨, 横穴式石室, 黄泉国訪問譚

はじめに

日本列島における長い国家形成過程において、西は鹿児島県から東は岩手県南部にかけての広い地域で、極めて数多くの古墳が築かれた。古墳時代に築かれた前方後円墳約4,200基、帆立貝形古墳約500基、前方後方墳約500基。円墳、方墳を加えるとその数は優に10万基を超える。その間、3世紀中葉から6世紀後葉までの約350年。今から見れば、まさに熱に魘されたように、各階層の人々が、各地で繰り返しかえし繰り返しかえし、大小の古墳を造りつづけたのである。

日本考古学では、この数多く造られた古墳の文化に一定の一体性と秩序が認められることから、その諸現象にヤマト王権や地域権力の生成・発展・変質を重ね合わせることによって、古墳時代の政治社会史的研究を深め、多くの成果を生みだしてきた。

しかし、古墳を造った政治社会的要因がある程度明らかになったとしても、人々をそこまで古墳づくりに駆り立てた宗教的、あるいは心理的要因が何であったのかを問わなければ、膨大な数の古墳が造りつづけられた要因の一面を捉え得たに過ぎない。こうした認識は多くの研究者が抱くところで、これまでも数々の試みがなされ、かなりの成果をあげつつあるが、いまだ十分なものとはなっていない。

考古学は「もの」を研究の対象にするだけに、こうした心の問題を取り扱うことは極めて苦手である。しかし、道が閉ざされているわけではない。

一つの方法は、古墳という遺跡の長所を最大限に活かすことである。

言うまでもなく、遺跡とは、遺物と遺構が様々な関係性をもって集中的に存在する場である。そこで、この関係性に注目すると、幸いなことに、古墳で行われた、墓域の選定から埋葬の終了までの一連の行為は、一定の作業手順や儀礼的約束に則って行われた一回性の高い整合性のある行為で、古墳という遺跡は、そうした行為の痕跡が累積した場なのである。そのため、腐朽し消失したものが多くとはいえ、後世に攪乱がなければ、その関係性はほとんどそのままそっくり地表下に残されている可能性が高い。その点が、人々の日々の活動が長期間続き、不規則な行為や偶然の出来事によって有意な関係性の多くが乱され、本来の関係性を復元することが容易でない集落遺跡などは、大きく異なるところである。だからこそ、これまで行われた数多くの古墳の調査では、遺構や遺物の検出はもちろん、様々な関係性の追求に多大な努力が費やされてきたのである。

したがって、古墳という場で行われた諸儀礼の実態を解明するためには、この長所を最大限に活かし、これまでの発掘の成果を踏まえつつ、まず最初に、古墳における人々の一連の行為をできるだけ具体的に復元し、その場その場における遺物や遺構の内容や機能や用い方を丹念に検討することこそが、何よりももっとも基本的で前提的な作業となる。それはちょうど、人類学者が未知の儀礼を前にして、その意味内容の理解はともかく、とりあえず儀礼の進行を追いながら、その場その場の人々の行為や道具立てを克明に記録するようなものである。考古学では、演じる人の姿はすでになく、多くの情報も失われてしまっているが、残された痕跡は、まぎれもなく千数百年前のもの、そのものなのだ。

このような視点から、筆者は、これまでにいくつかの小論を公にしてきた〔和田1989・1995・

1997・2003・2007・2008]。しかし、それは、古墳で行われた人々の行為の一部や、古墳を構成するいくつかの要素の個々の検討であって、それらの背景にある当時の人々の死生観や他界観については、ほとんど触れられずに終わっている。

そこで、ここでは、これまでの作業の過程で考えたことをもとに、先行研究をも参照しながら、古墳の他界観について、自分なりにデッサン的な仮説をたて、今後の研究の方向性を探りたいと思う。

葬送の儀礼は、死者を送る人々の思いのもとに、遺体を処理するという現実と、他界観という観念とが交差するところで、身体的・言語的・精神的行為が一定の筋書きに則って行われた儀礼的行為に外ならない。それは、一定の筋書きに則って演じられた演劇的行為と言い換えることもできる。考古学では、言語的行為に触れることは難しいが、この演劇的行為の舞台装置や道具立てを遺構や遺物としてかなり理解することができるし、先述の方法によって、ある程度は人々の身体的行為を復元することも可能である。そこで、ここでは、それらを頼りに、それらをつなぐ筋書きとその背後にある他界観について若干の考察を試みようというのである。古墳は最終的に「他界の擬えもの(模造品)」として整備されたというのが、ここでの結論である。決して目新しい見解とは言えないが、今回は、これまでに提出されてきた古墳他界説とは少し違った方法で、それを語ってみたい。それによって、部分、部分の解釈ではなく、時期差や地域差をも考慮に入れつつ、古墳の諸要素全体をより総合的に把握したいと思うからである。

①……………古墳の築造と埋葬の手順

(1) 手順の概要

では、まず、前・中期の畿内で典型的な、竪穴式石槨に割竹形木棺を納める前方後円墳を中心に、これまでに明らかになっている古墳の築造と埋葬の手順について、その概要を述べることから始めよう。

[モガリ儀礼]

首長の死——喪屋——遺体の運搬

選地——墳丘の築造——墓坑の掘削——墓坑の埋めもどし——葺石・埴輪の整備

石槨の構築

棺の設置

遺体の納棺

副葬品の配置

[地鎮儀礼]———[納棺・埋納儀礼]———[墓上儀礼]

[墓前儀礼]

上段は、古墳以外の場所で行われたと考えられるもので、首長の死の後、一定期間、喪屋においてモガリ儀礼が行われ、その後、遺体は古墳へと運ばれた。⁽¹⁾

下段は、古墳の場で行われたもので、墓域を定め、墳丘を築き、墓坑を掘削し、石槨を営みつつ、

棺を安置し、遺体や副葬品を納めた後、墓坑を埋めもどし、葺石・埴輪を整え、古墳づくりは終了する。この間、複数箇所において、炭や灰(火の使用)、あるいは土器や石製品や土製品などといった遺物の出土から、何らかの儀礼が行われたことを推測させる痕跡が認められるが、ここでは、墳丘の築造に先立つものを地鎮儀礼、墓坑の掘削から埋めもどしまでの一連の行為を納棺・埋納儀礼、墓坑埋めもどし後の墳丘頂部でのものを墓上儀礼、墳丘裾部でのものを墓前儀礼としておく。

(2) 手順の各段階

つぎに、以上の手順の各段階のうち、おもに古墳において検討できるものについて、今回の検討に関連する情報を少し詳しく整理しておこう。

① 選地

首長の生前か死後か(寿陵かどうか)はここでは問わないが、古墳づくりは墓域の選定に始まる。本来、どこに古墳を造るかは、宗教的にも政治的にも極めて重要な選択であったと考えられるが⁽²⁾、現状では十分議論されてはいない。畿内の首長墳の場合は、前期には丘陵上に、中期には低い段丘平坦面上に、後期には再び丘陵の上や裾に築かれた場合が多いが、地域によっては、たとえば福井県松岡古墳群の前方後円墳が前・中期を通じて多くが丘陵上に築かれたように、必ずしも同一の動きを示さない。そのなかでは、前期古墳の多くが丘陵上に立地することから、母集落や交通の要衝を見下ろす位置に築かれたという理解が一般的で、かつては山上他界と結びつける意見も提出されている[大場1950]。

② 墳丘の築造

墳形は前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳の四つが基本で、いずれも墳丘頂部に広い平坦面をもつ。墳丘は段築で、斜面に葺石、平坦面に埴輪列が備わり、周濠がめぐる。このような組合せは日本列島の古墳独特のものである。

段築は、大王墳クラスの巨大前方後円墳では、奈良県箸墓古墳(前期前葉)に始まり、後円部5段・前方部4段を数える。後円部の段数が前方部より多く、最上段が円丘をなす形態は奈良県オオヤマト古墳群の巨大前方後円墳に共通する。後円部と前方部がともに3段となり、最上段が前方後円形になるのは前期後葉の奈良県佐紀古墳群西群からのことで、大阪府古市古墳群の津堂城山古墳(中期前葉)以降の中期古墳はこの延長上にある。

周濠は、箸墓古墳から見られるが、西殿塚古墳(前期前葉)では、一部に空濠的なものが認められるものの、明瞭なものがない。続く行燈山古墳や渋谷向山古墳(前期中葉)では陸橋に区切られた階段状の周濠がつき、佐紀陵山古墳(前期後葉)の前後2段の周濠を経て、津堂城山古墳で単一面の盾形周濠が完成する。ちなみに、後述の造出が付設されだすのもこの古墳からである。周濠に水が溜っていたかどうかは明確ではないが、奈良県纏向石塚墳丘墓(弥生終末期～古墳前期前葉)の前方部先端の周濠に小溝が流れ込んでいたらしい遺構が見つかったの[寺沢1989]を除けば、積極的な給水が行われた例を知らない。少なくとも前期後葉頃からは滞水することが前提となったと思われるが、それは天水に任されていた可能性が高い。

墳丘は土を盛ったり、丘陵の地山を削りだしたりして造られた。ただ、墳丘の築造と墓坑掘削以後の手順は一樣ではなく、図1のように整理できる〔和田1989〕。

畿内の前・中期中古墳に典型的な類型は「掘込墓坑a類」で、墳丘の盛土が完成した後に改めて墓坑を掘削する。墳丘の築造が埋葬施設の構築に先立つという意味で、「墳丘先行型」と呼ぶ。墳丘を築き、墓坑を掘り、棺を据えつけ、遺体を納めるという手順も列島の古墳の特色で、それは、後述の「据えつける棺」とともに、弥生時代に畿内を中心に発達した方形周溝墓の伝統を引くものと考えられる。やはり、列島の古墳に特徴的な墳丘上の平坦面も、こうした手順上、どうしても必要なものだったのである。

これらの点は、地下や地表に埋葬施設を営んだ後に墳丘を築く中国や朝鮮半島諸地域に多い「墳丘後行型」の墳丘墓とは際立つた差異を示している。そこでは槨を用いる場合、遺体の埋納は墳丘の築造に先立って終了する。また、埋葬施設が横穴系の「室」の場合は、墳丘の築造が終わってからも地下の施設に遺体を埋納できるように、墓道や羨道が設けられるのが基本である。したがって、「墳丘後行型」の場合は、人々は墳丘に登ることなく一連の埋葬儀礼を完遂したのであって、墳丘は「登らない墳丘」と言うことができる。

しかし、列島の古墳は「墳丘先行型」の「登る墳丘」で、儀礼の多くの部分は墳丘の上で実修された。「登る墳丘」は、葬送儀礼のなかでももっとも重要な納棺・埋葬儀礼が執りおこなわれる、舞台ともなったのである。

なお、列島の古墳が「登る墳丘」であるとすれば、前方後円墳には墳丘へと登る出入口（登り口）が必要となるが、それは墳丘側面のくびれ部周辺に設けられた〔和田1997〕。周濠を持たないものでは、奈良県ナガレ山古墳例（中期前葉）〔吉村1993〕がその良い例である。一方、周濠のある前方後円墳の場合は、墳丘の築造時には各所に作業用の陸橋が掘りのこされ、作業者はそこから出入りしたが、最終的には撤去された。そのなかで、埋葬時に遺体を搬入したり、参列者が出入りした儀礼用の通路はくびれ部周辺に設けられた陸橋で、人々はここから前方部に上がり、後円部頂上の平坦面へと到ったと推測される。中期に出現してくる造出は、この出入口における儀礼の場が墳丘側に取りこまれ固定化されたと考えられる施設で、前方後円墳の出入口なのである。

③ 埋葬施設の構築と埋葬

「掘込墓坑a類」では、墓坑は、墳丘の盛土が終わった後の後円部頂上平坦面の中央に穿たれた。掘削に当たっては、上部から掘りこむだけではなく、後円部の前方部側斜面から墓坑に向けて作業用の道が掘られ、土砂の搬出や石槨石材、粘土、棺などの搬入に利用された〔和田1997〕。以後の手順は以下のようなものである（図2）〔和田1989〕。

- a：墳頂部より墓坑を掘りこむ。本格的なものは2段墓坑で下部に石槨を営む。
- b：墓坑の底に礫を詰め、板石を敷いた上に粘土棺床を築く。礫は四周の溝とあいまって排水溝

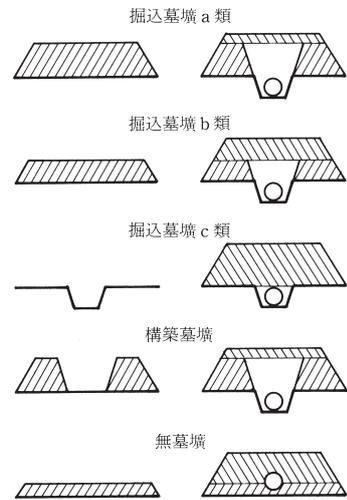


図1 墳丘と墓坑の築造手順
〔和田1989〕

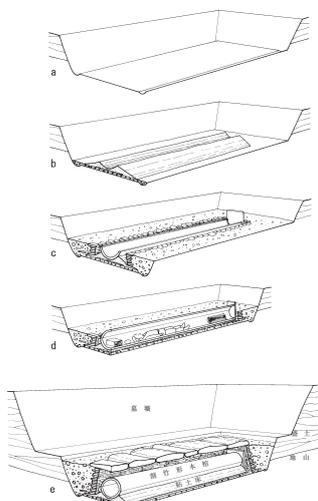


図2 「掘込墓坑a類」での
竪穴式石槨の構築手順
〔和田1989〕

- の役割を果たす（この基礎構造は古墳によって多少異なる）。
- c：割竹形木棺の身を設置し、まわりに板石で石槨の下部を築く。棺や石槨の内部には赤色顔料（朱やベンガラ）が塗布されていて、これで「最終的な納棺の場」が整ったことになる。（この時点で、墓坑上縁から、遺体が下ろされ、近親の参列者が降りてくる。）
- d：遺体を納め、副葬品を配し、棺の蓋をする。遺体には朱が振りかけられ、副葬品は棺の内外に一定の約束にしたがって配される。
- e：石槨の上部を築き、天井石を架ける。入念なものは、さらに粘土で覆い磔⁽⁶⁾を敷く。
- f：墓坑を埋めもどす。粘土棺床のなかや、石槨の控え積み、天井石の上などに鉄製の利器を配す場合もある。

ここでは、石槨の構築と、棺の設置、遺体の納棺、副葬品の配置が一体的に進行した。こうした手順がとられた最大の要因は、棺が、遺体を入れて「持ちこぶ棺」ではなく、棺を墓坑内に設置しておき、そこに、別に運んできた遺体を納める「据えつける棺」であったことによる。その結果、墳丘上での行為には、単に遺体の入った棺を墓坑に納めるといったことだけではなく、親族や縁者が死者との最後の別れを告げる納棺や、副葬品の配置、朱の散布といった行為が含まれることになり、墓坑内は、あるいは墳丘は、葬送儀礼全体のクライマックスをなす重要な行為の舞台となったのである〔和田1995〕。このことが、後述するような、いくつかの「古墳＝儀礼の舞台説」を生みだす要因となったが、以上の墓坑内の儀礼には、納棺・埋納儀礼以外の痕跡は認められない。

また、こうした棺の用い方が、荘厳な棺を作るために棺を長大化することも、不朽の棺を作るために堅牢で重量のある石の棺を求めることも可能にした。そこでは、耐水性に優れ腐りにくいコウヤマキを用いて長さ6～8mもの割竹形木棺（図3-2）が作られたし、前期後半には、今では考えられないような重さ6、7トンもある凝灰岩製の石棺が生みだされたのである。

ところで、この時期の棺とそれを保護する石槨は、棺・槨そのものの性格に加え、上記のような石槨の入念な構築方法、赤色顔料の塗布や散布、利器の埋納、後述のような鏡の配置などからもわかるように、遺体を保護し、邪悪なものへの侵入を防ぐとともに、遺体に邪悪なものを取りついて暴れだすのを防ぐ役割が期待された。そこで、このような機能をもつ棺を「閉ざされた棺」と呼ぶ〔和田2003〕⁽⁷⁾。

このような棺・槨は、遺体を保護・密封することが最大の目的で、内部空間にも余裕がない。言い換えれば、そこには、内部で死者が生前と同じような生活を送るといった観念はほとんど認められず、期待もされていなかったと推測される。そして、そうした性格は副葬品にも表れた。

④ 副葬品の配置と構成

副葬品は遺体の安置後に、棺内や、棺外の棺身と槨壁との隙間や、棺蓋の上に配された。

典型的な例として奈良県黒塚古墳例（前期前葉）
[宮原 1999] を取りあげると（図 3-1）、遺体は仕切板で区切られた棺中央の区画の朱の分布する範囲に北枕に安置されていたが、同じ区画内の遺体の北側（頭側）には、画文帯神獸鏡 1 面が鏡面を北側に向けて仕切板に立てかけるように置かれ、遺体の東側には鉄剣 1 振が、西側には鉄刀と刀子各 1 振が、いずれも遺体と平行に、切先を南側（足側）に向けて置かれていた。棺内の副葬品は少なく、他には北側の区画の広範囲に漆皮膜が認められただけである。一方、棺外では、棺身と槨壁との隙間に数多くの副葬品が配されていた。棺の北側をコの字形に囲むように三角縁神獸鏡 33 面が鏡面を遺体側に向けて立てかけるように置かれ、それと重なるように、あるいは一部は足もと西側に離れて、鉄刀、鉄剣、鉄槍、鉄鏃、Y 字形鉄製品などが配され、北側小口部には盾かと推定される朱塗りの木製品や U 字形鉄製品や棒状鉄製品（ともに性格不明）も置かれていた。また、南側小口部には、鉄鏃、小札革綴胃、鉄斧、鉄鉈、水銀朱の容器かと推定される土師器の甕や高杯が置かれていた。

典型的な前期前葉の古墳の副葬品は、棺内には少なく、棺外（槨内）に数多く配されるのが特徴で、黒塚古墳例も同様であるが、棺外では、遺体の頭部側を取り巻くように鏡や武器類が配され、しかも、いずれの鏡も鏡面を遺体側に向けているのが注目される。鏡を棺外に並べる同様な例は、京都府椿井大塚山古墳（前期前葉）で見られるが、そこでは、鏡面は遺体と反対側の外側に向いていたと報告されている [樋口 1998]。鏡に邪悪なもの姿を映しだしそれを追い払う力があるとするれば、これらの配置状況には、邪悪なものが遺体に近づかないように（椿井大塚山例）、あるいは邪悪なものが寄りついて遺体が暴れださないようにする（黒塚例）という意図があったものと理解したい。武器、武具類の副葬にも、つぎに述べるような性格とは別に、そうした意図が含まれていた可能性がある。

前期前葉の古墳の副葬品は、基本的に、鏡、武器類、農工漁具類から構成されていて、時には、これに玉類や武具類が加わる。それらは宗教・政治（鏡、玉類）や戦争（武器・武具類）や生産（農工漁具類）の道具で、被葬者である首長が生前に担っていた社会的諸機能・諸権益を象徴するもの、言い換えれば、首長の地位を保証する象徴的な品々であった。したがって、それらを首長の遺体とともに副葬する意味には、首長が首長として死に、死後の世界においても現世と同様、首長としてありつづけるという思いがあったものと思われる。⁽⁸⁾したがって、首長の性格の変化とともに、首長の地位を保証する品々の内容が変われば、自ずと副葬品の内容も変化していった。

しかし、前・中期の古墳の副葬品には、死者が死後の世界で現世と同じような日常生活を送るた

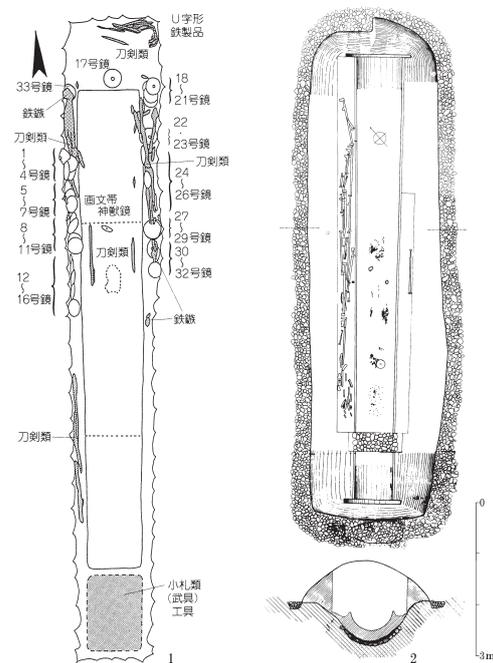


図 3 1 奈良県黒塚古墳の遺物出土状況模式図 [宮原 1999]
2 大阪府和泉黄金塚古墳中央槨の割竹形木棺と粘土槨 [末永他 1954]

めの品々はついに含まれなかった。この点については多くの研究者が指摘しているが、それは、先に指摘した棺・槨の性格とも共通する。中国における槨から室への他界観の変遷に照らし合わせれば〔黄1999・伊藤1998〕、この時点での死後の世界観は、死者の魂は他界へと赴くとは観念されていたとしても、死者は死後においても墓の埋葬施設のなかで現世と同様の日常生活を送るという観念が発達する段階までには到っていなかったものと思われる。

⑤ 葺石・埴輪の整備

墳丘に葺石が施され埴輪が立て並べられるのは、遺体の埋納が終了してからのことと考えられるが、現状では、前二者と後者の前後関係は必ずしも明確ではない。埴輪の中核をなす後円部平坦面中央の家形埴輪を含む一群の埴輪の樹立が、確実に埋葬終了後のものであることからすれば、葺石と埴輪の整備が完了するのは、遺体の埋納が終わってからのことであるという方がより正確だろう⁽⁹⁾。古墳は埋葬終了後に、葺石を施し埴輪を樹立して、何らかのものに仕上げられたのである。

葺石は墳丘の斜面に施された。そのため、完成後の古墳の側面観は、まさに石の山のようにであった。埴輪は、一つの様式として完成してくる前期後葉～中期前葉の例をみると、墳丘の各平坦面や、時には墳丘裾部に、円筒埴輪や朝顔形埴輪が列をなして立て並べられ、後円部頂上中央の埋葬施設の上には、方形壇を中心に方形埴輪列が樹立され、その中心に家形埴輪群が置かれ、周辺には蓋・盾・鞆・大刀形埴輪などの器財形埴輪が配された。埴輪群全体の中心は家形埴輪群で、それは複数の異なる型式の家形埴輪から構成された首長の居館⁽¹⁰⁾（図4）を表現したもので、他は、家形埴輪群を邪悪なものから護るために配された武器・武具類、および権力者や貴人の身辺やその建物を護り権威づける道具類からなっていると理解される。また、墳丘を幾重にもめぐる埴輪列は、器台を示す円筒埴輪と、壺をのせた器台を示す朝顔形埴輪で、それは異世界との境界を画し、寄り来る邪悪なものを饗宴して追い返す結果としての機能が考えられる〔水野1974〕とともに、さらには、墳丘上の世界は飲食物に充ち満ちていることを表しているとも理解できる。

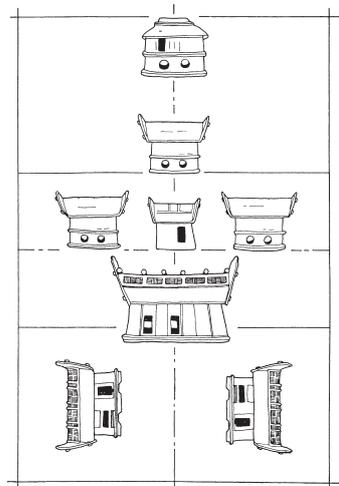


図4 群馬県赤堀茶臼山古墳の
家形埴輪配置復原藤澤案
〔野上1976〕

「埴輪の祭祀」と呼ばれることが多いが、それは誤解を招きかねない言葉で、埴輪そのものは決して儀礼や祭祀で用いられたものではない。これまで提出されている意見を参考にすれば、埴輪は、墳丘を舞台として執りおこなわれた儀礼を再現し固定化するために置かれた模造品か、あるいは、墳丘全体を何らかに擬えて、そこにあるべきものとして立て並べられた模造品かのどちらかであろう。どちらを採るかは、古墳そのものをどう解釈するかに係わっているが、それについては、後に改めて検討する。

なお、墳丘上には、埴輪以外にも、「木の埴輪」と呼ばれる、笠形や鳥形を飾った木柱や、玉杖風の装飾板（いわゆる石見型）が立て並べられ、杖形や翳形などの木製品も配されたが、ここでは基本的に埴輪と同様の機能を考えておきたい。

⑥ 墓上儀礼と墓前儀礼

墓坑が埋めもどされ、葺石・埴輪が整備された後、言い換えれば、古墳が完成した後にも人々は墳丘に登り、何らかの儀礼を行った。ここでは、それを墓上儀礼としている。

京都府寺戸大塚古墳（前期中葉）[京都大学 1971] や三重県石山古墳（中期前葉）[小野山他 1993] の例がこれにあたり、ともに後円部頂上の方形埴輪列の外側から土師器の壺や高杯などが出土し、何らかの儀礼が執りおこなわれたことを示している。また、後円部墳頂平坦面の外周をめぐる埴輪列との前後関係は明らかでないが、京都府作山1号墳（前期後葉・円墳）[佐藤 1992] や岐阜県昼飯大塚古墳（中期前葉）[中井他 2003] などでも、土師器や食物形土製品、あるいは両者とともに笊形土器や玉類などが出土している。大型前方後円墳の墳頂部平坦面が丁寧に調査された例が少ないため、あるいは調査されても耕作や盗掘などで荒らされている場合が多いため、出土状況がわかる例は多くはないが、こうした儀礼は普遍的なものであったと推定する。

一方、墳丘裾部の墓前儀礼は、奈良県東殿塚古墳（前期前葉）[松本他 2000] の造出状の施設においてすでに認められ（若干特殊な円筒・朝顔形埴輪と土師器が出土）、中期以降も、墳丘の出入口（ナガレ山古墳など一石製模造品などが出土）や、造出でも行われた。兵庫県行者塚古墳例（中期前葉）[菱田他 1997] はその良い例（図5）で、前方部から見て、くびれ部左側の造出では、四周に円筒埴輪を巡らせたなかに家形埴輪群が置かれ、その前から土師器の小型壺や高杯などとともに笊形土器や各種の食物形土製品が検出されている。円墳などで墳丘の裾部に置かれた土器類も、これに加えることができるだろう。

古墳完成後の墓上儀礼や墓前儀礼の実態は、以上のように、食物供献を中心とした儀礼で、出土土器の量からしても、参加者はさほど多くはなかったものと推定される。墓上儀礼と墓前儀礼の関係は不明だが、出土遺物から見る限り両者は食物供献を中心とする類似した内容のもので、一つの古墳で両者、ないしはどちらかの儀礼が行われたものと推測しておきたい。⁽¹¹⁾

ところで、ここで注目されることは、前期前葉から中期前葉にかけての例が、いずれも1回きりで、儀礼の後には片隅に取り片付けられているのに対し、前期後葉から中期にかけてのものは、儀礼が行われたであろう本来の場所に、他の土器類とともに、食物形土製品や笊形土器が儀礼の情景そのままに残されていることである。すなわち、前期後葉から中期前葉の間に、1回きりの食物供献を中心とした儀礼が、腐らない土製品を用いることによって、永続的に続く儀礼として固定化されたのである。その時期がちょうど埴輪に器財形埴輪が出そろってくる時期にあたるのも興味深い。

結論を先取りして言えば、「他界の擬えもの」としての古墳が整備されていく過程において、首長霊を対象とした食物供献を中心とした儀礼が、永続性のあるものとして固定化してい

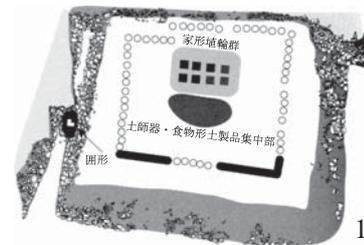


図5 1 兵庫県行者塚古墳西造出の復元模式図[高橋 2005]
2 出土の土師器高杯・笊形土器・土製品[菱田他 1997]

たとえられるのである。そして、それは、死者と参列者の共飲・共食の儀礼を示すというよりは、首長である死者の魂に山海の幸を奉納する儀礼が継続的に行われていることを示すものと言えるだろう。

⑦ 埋葬儀礼終了後

古墳での儀礼的行為はこの段階をもって終了する。中国のように継続的な祭祀を行う施設もなく、定期的に人々が古墳を訪れ何らかの祭祀を行った痕跡も発見されていない。古墳の意味を考える上で、この点もまた極めて重要なポイントである。

なお、現状では、墳丘上での儀礼の跡を追っても、前方部が重要な役割を果たした証拠を認めることはほとんどできない。初期の古墳である箸墓古墳の前方部先端の最高所で二重口縁壺形土器片〔中村・笠野 1976, 徳田・清喜 2000〕が、京都府元稲荷古墳の前方部中央で壺形土器をのせた6, 7本の特殊器台形埴輪〔京都大学 1971〕が発見されている程度である。

弥生墳丘墓の発展過程において、墳丘への入口部（通路）が儀礼の場として突出部となり、それが大型化して前方部へと発展するという変遷が追える〔近藤 1977 a・都出 1979〕が、前方後円墳として定型化して以降は、出入口が墳丘側面のくびれ部周辺へと変化したことが、前方部の性格を変えたものと推測される。後円部頂上の墓坑内で行われた納棺・埋納儀礼の折に、近親者は上縁から墓坑の内部に降り、他の多くの参列者は前方部上に居並んだと想定することも不可能ではないが、想像の域を超えない。そのためもあってか、前方部は徐々に追葬の場となっていった。

②……………宗教的側面における古墳の二つの性格

以上、前・中期古墳に典型的な、竪穴式石槨に割竹形木棺を納める前方後円墳の埋葬手順を中心に、道具立ての種類や機能や用い方を含めて、古墳を構成する諸要素を検討してきた。全体の姿は、前期前・中葉にはあまり明瞭ではないが、前期後葉から中期前葉になると、かなりはっきりとしてくる。以下では、それを宗教的側面における古墳の二つの性格として整理したい。一つは、現実の実態として存在する遺体を扱う「墓」としての性格である。そして、もう一つは、遺体の埋葬後に仕上げられた模造の世界としての性格で、ここでは、それを「他界の擬えもの」と捉えたい。

(1) 「墓」としての古墳

1. 典型的な前・中期の古墳では、墳丘の築造後に改めて後円部頂上の平坦面に墓坑を穿ち遺体を納めた。この「墳丘先行型」の手順は列島の古墳の大きな特徴で、石槨が加わった点を除けば、この特徴は、棺の用い方とともに、弥生時代の方形周溝墓の伝統を引くものと考えられる。
2. 墓坑の内部では、粘土棺床の設営—棺身の設置—竪穴式石槨下部の構築—遺体の納棺と副葬品の配置—棺蓋の設置—石槨上部の構築と、石槨の構築と納棺・埋納儀礼とが一体的に進行した。この墓坑内の一連の手順は、棺が「据えつける棺」であったことによる。その結果、埋葬儀礼の中心をなす納棺・埋納儀礼は墳丘頂上の墓坑内を中心に行われることになった。
3. 棺とは別に古墳へと運ばれた遺体や近親の参列者は、くびれ部付近に設けられた出入口（後の

造出)から墳丘に入り、前方部を経て後円部頂上へと上がり、墓坑の上縁から内部へ下りた。したがって、列島の古墳の墳丘は、埋葬儀礼の折りに人々が「登る墳丘」で、墳丘は儀礼の主要な舞台となった。

4. 棺の機能は遺体を密封する「閉ざされた棺」で、鏡や鉄製利器類や赤色顔料によっても封じられ、さらには堅穴式石槨によって護られた。そこには、遺体を保護するとともに、辟邪なものへの進入を防ぎ、邪悪なものが寄りついて遺体が暴れ出すのを防ぐ目的があったものと推測する。古墳の第一義は「墓」であるが、以上の結果、遺体は墳丘頂上直下に密封されることになった。
5. 遺体とともに副葬された品々は、亡き首長が生前において担っていた社会的諸機能・諸権益を象徴するような、宗教・政治を示す鏡や玉類、戦争を示す武器・武具類、生産を示す農工漁具類が中心で、それは、死後の世界においても首長を首長たらしめる品々と言えるが、それらも遺体とともに密封された。そこには、死者が棺・槨のなかで生前と同様の日常生活を送るための空間も道具立ても認められない。

(2) 「他界の擬えもの」としての古墳

1. 段築で造られた墳丘は、その後、葺石を施し、埴輪を立て並べ、周濠をめぐらせて一つの模造された世界として仕上げられた。古墳を他界とする考えは古墳時代の当初からあったと推定されるが、それが一つの様式として完成してくるのは前期後葉から中期前葉のことである。
2. そこでは、後円部頂上の方形埴輪列内に配置された一群の家形埴輪を中心に、周囲にそれを護り権威づける蓋・盾・靱・甲冑・大刀形埴輪などを配し、墳丘の各平坦面には、墳丘を取り巻くように円筒埴輪や朝顔形埴輪からなる埴輪列が結界を示すものとして樹立され、時には「木の埴輪」を中心とする木製品類が加えられた。

円筒埴輪が飲食物を入れた食器の台で、それに酒類や食物の入った壺をのせたものが朝顔形埴輪である。また、壺形埴輪だけで埴輪列が構成されている場合もあれば、墳頂の方形埴輪列では時には円筒埴輪に高杯を載せた例も認められる。墳丘下に密封された棺・槨内には飲食物、あるいはそれを入れる食器の類は認められないが、墳丘上に表現された世界には飲食物が充ち満ちている。

3. 葺石が施され、埴輪が立て並べられた後の墳丘にも、人々が訪れ、墳丘頂上や墳丘裾の出入口付近で土器などを使った儀礼を行っている。前期前半頃のものには土器類を用いた1回きりのものだが、前期後葉になると、そこには食物形土製品や筥形土器が加る例が認められるようになる。食物形土製品は生の海の幸・山の幸を模造したもの、筥形土器は竹などの編籠を模造したもので、そこには食物供献を中心とした儀礼を、永続的に続くものとして固定化しようとの意図が読み取れる。
4. くびれ部の出入口(造出)から墳丘に入り、斜面を登った岩山の頂上に、防御堅固で威儀を正した死者の棲む居館があり、そこは飲食物に満ち、日々新たな山海の食物が供えられている。古墳に表現された他界のイメージは、このようなものだったのではないだろうか。それは神仙の棲む世界のイメージと重なるが、「渴けば玉泉を飲み、飢えれば棗を食す」仙人の世界とは少し異なっている。

なお、一部の有力な古墳で、墳丘頂上の家形埴輪群とは別に、墳丘裾の出入口（造出など）にも家形埴輪群が配置されていることについては、山頂の家と山麓の家が対になっていた可能性を考えている。

5. 古墳は飽くまでも「他界の擬えもの」で、家形埴輪群も死者の魂が他界で恒常的に棲む居館の模造である。したがって、家形埴輪には、何かの折に他界から首長の霊が寄りくるといったような観念はなかったものと思われる。古墳が完成して以降は、継続的な祭祀が行われた痕跡が認められないのはそのためであろう。継続的な首長霊の祭祀が執りおこなわれたとすれば、それは場を外に求めなければならない。

これまで、古墳のうち、特に前方後円墳は、各種の墳形起源説を伴いながら、単なる墓ではないとして、様々に説明されてきた〔茂木1988、大塚1994〕。主なものは、墳丘を、首長霊継承儀礼の場とみなす説〔水野1971、近藤1977bなど。広義の墳丘舞台説〕であり、他は中国の神仙思想のなかで重要な位置を占める蓬莱山（壺形の宇宙）〔三品1973、川西1999、岡本1999・2000、辰巳1996、車崎2000など〕や崑崙山〔都出1989など〕などに見立てる他界説である⁽¹²⁾。

そのなかで、首長霊継承儀礼の場とする説は魅力的ではあるが、墓坑内の儀礼はもちろん、墳丘上で行われた儀礼にも首長権継承儀礼の存在を示唆するものはほとんど認められないことから、立論に無理があるように思われる。水野正好氏の立論で重要な役割を果たした人物埴輪や動物埴輪も、古墳時代中期の中・後葉に、他界で首長の魂が首長でありつづけるのに必要な要素として新たに加えられたものと解釈すべきであろう。敢えて特別な首長権継承儀礼の場を表現していると思えず必要はないように思われる。人物・動物埴輪は、首長に奉祀する一群の人々や動物が参集する年中行事的な饗宴をともなう何らかの儀礼、たとえば年ごとに行われる朝賀の儀式などをもとに、他界においても諸々の者が絶えず首長に奉仕している姿を中心に構成されていると考える方が妥当である。また、以上の立場から、葬列説や殯説、あるいは死者を顕彰する頌徳像説などはとらない。狩猟の表現は、それが首長にとって不可欠なものだったからである。

一方、他界説については、論者によって少しずつ内容に差異があるが、ここでは、上記の通り、古墳を「他界の擬えもの」と考えることによって、墳丘上の諸要素が整合的に理解できるものとする。

竪穴系の槨の時代である古墳時代前・中期には、「魂気は天に帰し、形魄は地に帰す」（『礼記』郊特性篇）とされる魂魄の思想が何らかのかたちで列島にも伝わってきていたと推測するが、肉体的要素である形魄は墳丘頂部の地下に密封され、一方の精神的要素である魂気は天（他界）へと赴きそこで永遠の命を生きることになる⁽¹³⁾。古墳の墳丘に形象されたのはこの他界であり、形魄が封じられた埋葬施設のなかには生活の気配はなく、形魄はそのなかで永遠の眠りにつく（肉体が朽ち白骨が大地に化すと形魄は消滅するともいう〔伊藤1998〕）。埋葬施設のなかで死者の空間や家と見なされ、そこで死者が日常生活を送ると観念されるようになるのは、後述するように、つぎの段階の、それも九州系の横穴式石室においてのことである⁽¹⁴⁾。

なお、擬えられた他界が崑崙山なのか蓬莱山なのかといった点は、どれか一つに決めつけられない方がよいと思われる。現在の検討の範囲では、前方後円墳は、天上への昇り口とされる内陸部の崑崙山よりは、死者の魂の棲むところとされる海上の蓬莱山の方がより適合的と思われる。しかし、

広範な古代中国において死者の魂が寄りくる山は各地にあったし、そのなかで崑崙山や蓬萊山が顕在化し、その意味内容が整えられてくるのにも、それぞれの歴史過程が存在したのである〔伊藤1998〕から、比較には慎重を要する。また、古墳には前方後円墳ばかりではなく、前方後方墳、円墳、方墳があり、いずれも弥生墳丘墓にその起源をもつことも、容易に一括して壺形の宇宙だけとは言えないところである。

それよりも、ここで注目すべきことは、首長の魂がいくべき他界の表現に形や規模のうえで差があることである。古墳の秩序はこの差を基本に成立し、ヤマト王権内における首長の政治的身分秩序を反映したものと考えているが〔和田2004〕、この秩序は他界における首長霊の秩序をも反映していた可能性が高い。古墳の宗教的性格は、この点において古墳の政治社会的性格と結びつく。王権による政治的統合の進展過程は首長霊の世界の統合とも不可分な関係にあったのである。

③……………古墳と船

(1) 遺体を運ぶ船

ところで、古墳と他界の関係を考える上で極めて重要な発見が、2006年、奈良県巣山古墳（前方後円墳・中期前葉）であった。周濠の北東隅（前方部側からみて前方部左外側）にあたる外堤の葺石裾部付近から木製品が集中的に出土し、そのなかの主要なものが、実物大の、豎板を立てた型式の準構造船に復元されたのである（図6）〔井上2006・河上2008〕。少し長くなるが、以下に報告の内容を紹介しよう。

「豎板（クスノキ）は約2.1m、幅約78cm、下部の厚さ約25cm、上部の厚さ約5cmで側面に突起が付き、表面には円文様を中心に直弧文が描かれる。基部は船底の丸木船を跨ぐように『ハ』字状に加工され、根元が太く湾曲するのに対して先端は薄く平らに仕上げている。裏の両側縁には溝があり、中程にずれがあることから舷側板が二段に当たっていたと考えられる。

舷側板（スギ）は約3.7m、幅45cm、厚さ約5cmで端部が反り上がる。上端には3箇所切り込みがあり、下端にも長方形の小孔が並び、1個の孔には桜の皮や木片が残り、背面の痕跡から5cm程の角材と繋いでいたことが推測される。表面には円文様と帯文様が彫刻され、円文様は方形区画の中に表現している。中央の円文様以外は帯文様が上に描かれ重複文様となり、赤色顔料が塗られていた痕跡が認められる。

三角形材（クスノキ）は長さ1.8m、幅38cm、厚さ5cmで一端は細くなり柄となっている。表面には円文様と帯文様があり、舷側板と関係があることがわかる。その他に丸太や加工した柱、板など多数の部材が出土している。」

「岡林孝作氏によれば、第5次調査出土の木製品は八尾市久宝寺遺跡出土の準構造船の豎板と基本的構造が同じであり、直弧文を画する帯表現は

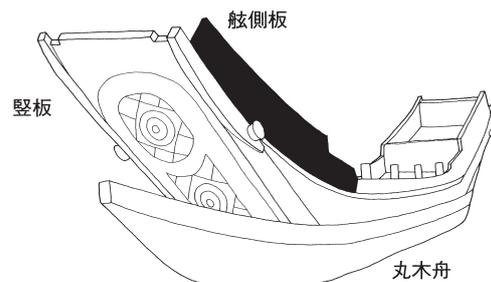


図6 奈良県巣山古墳出土船形木製品の復元図〔井上2006〕

大阪市長原高廻り2号墳出土の船形埴輪の豎板表現に酷似するという。円文様と直弧文で飾られた木製品は準構造船を構成する豎板である可能性が高くなった。これは『古事記』仲哀記、忍熊王の反逆記事の中の『喪船』（棺を載せる船）とみられ、葬送儀礼に使用されたと思われる。船形埴輪はこうした靈柩船を模したものと考えられる。」[井上2006]

この船が一般的な船でないことは、部材に円文様や直弧文が浮き彫りされ、赤色顔料が塗られている点から理解できる。そして、古墳の周濠の底部から出土したことで、それが古墳に関する船であろうとの推測も当を得ている。その意味で「喪船」説は十分説得的である。ただ、「棺を載せる船」というカッコ内の解説は適切ではなく、⁽¹⁵⁾前述したように、当時は遺体を棺に入れて運ぶ「持ちこぼ棺」ではなく、棺は古墳の墓坑内に据えつけておく「据えつける棺」であったと推測されることから、この船は遺体そのものを乗せて運んだものと考えられる。

このような船としては、『隋書』倭国伝の「死者は斂むるに棺槨を以てし、親賓、屍について歌舞し、妻子兄弟は白布を以て服を製す。貴人は三年外に殯し、庶人は日を下して瘞む。葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽くに、あるいは小輿^{うず}を以てす」という記事[石原1951]の船が知られていたが、それが初めて出土したのである。

僅か一つの出土例ではある。しかし、それは、船形埴輪と比較することによって、大きな普遍性をもつことになる。なぜなら、これまでから船形埴輪は死者の魂の乗り物と多くの研究者によって指摘されてきていたからである[辰巳2002など]。

(2) 魂を運ぶ船

そこで、船形埴輪に目を向けると、それは中期を中心とした40基ほどの古墳から出土しており、分布は大阪府を中心に、数は少ないものの、西は宮崎・大分県から東は茨城・栃木県まで及んでいる[松阪市2003]。

ここで注目すべきはその出土位置である。

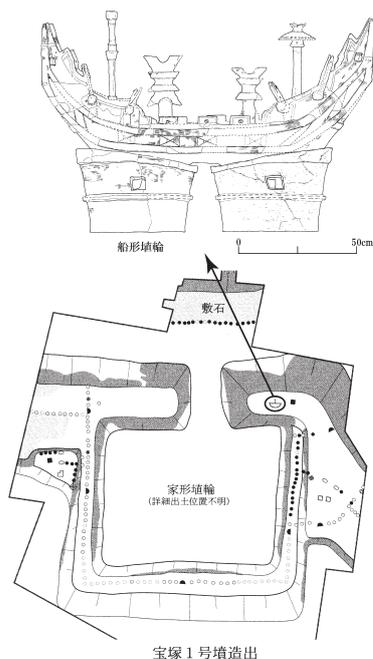


図7 三重県宝塚1号墳の出島状造出模式図[高橋2005]と船形埴輪[福田他2001]

前方後円墳では、三重県宝塚1号墳例(中期前葉)[福田他2001]はくびれ部の前方部寄りに造られた出島状の造出と前方部との間の基底面に置かれていた⁽¹⁶⁾。茨城県玉里舟塚古墳例(後期中葉)[大塚・小林1971]は造出から転落した状況で出土したが、本来は造出上に人物埴輪や家形埴輪などとともに置かれていたと推測されている。また、福岡県堤当正寺古墳例は後円部頂上に置かれていたもので、大分県亀塚古墳例や宮崎県下北方13号墳例も、後円部墳丘斜面や平坦面に転落していたが、本来は後円部頂上に置かれていたものと推測される。

一方、造出付き円墳では、岡山県月の輪古墳例[近藤1960]は、造出上からの出土であり、大阪府寛弘寺5号墳例[森1950]はくびれ部近くの埴輪列内からの出土である。

他に、円墳や方墳(多くは方形周溝墓)では墳頂や周濠(周

溝)内からの出土で、多くは墳頂に置かれていたものと考えられるが、大阪府高廻り2号墳(円墳)[高橋1991]例は当初より周濠の底に置かれていた可能性が高いという。

このように見ると、前方後円墳や造出付き円墳では、九州の前方後円墳の例を除けば、いずれも造出周辺からの出土であることがわかる。言い換えれば、船形埴輪が置かれるべき本来の位置は古墳の出入口だったのである。高廻り2号墳例も同様に解釈できる。

とすれば、遺体を運ぶ船と、「他界の擬えもの」としての古墳の出入口にある魂を運ぶ船から、つぎのような推測が成りたつ。

すなわち、古墳時代には、首長が死ぬと、その魂(魂気)は船に乗って他界へと赴くと観念されていたが、実際の葬送儀礼においては、一定期間のモガリ儀礼を行った後に、魂が他界へと旅立つ様子を現実の世界で再現すべく、遺体を実物大の飾られた船に乗せて牽引し、「他界の擬えもの」である古墳へと誘ったのであろう。さらに言えば、古墳の出入口に停泊する船をかたどった船形埴輪は、古墳から他界へと旅立つ船ではなく、首長の魂が間違いなく他界へと到着したことを示す船だと理解されるのである。⁽¹⁷⁾

このような死者の魂を運ぶ船の観念は、船形埴輪の出現をまつまでもなく、奈良県東殿塚古墳(前期前葉)の造出状の施設から出土した鱈付き楕円筒埴輪に描かれた船(図8)にも認められ、古墳時代の初めから存在していたものと思われる。⁽¹⁸⁾そこでは、船上に家、蓋、吹き流しや幡状の立ち物を配し、舵や櫂で操舵する Gondola 型(1・3号船)や 縦板型(2号船)の3艘の準構造船が描かれ、舳先には鳥(鶏)が留まっている。

首長の遺体を運ぶ船は、他界へ魂を運ぶ船に相応しく荘厳に作りあげられ、多くの人々が見守るなかを、多くの人々によっておごそかに牽引されていったのであろう。首長の葬送儀礼にまつわる諸行為のうち、モガリ儀礼や墓坑内の納棺・埋納儀礼など参加者が少人数に限られたであろう部分を除けば、他は共同体の重要な儀礼であり、一種のイベントとして多くの人々が参加し、多くの人々がこれを見守ったものと思われる。そして、首長の死の扱われ方を通して、首長の、延いては共同体の地位の社会的承認を得たものと思われる。ちなみに、そのためにも、モガリの方は古墳から一定度離れている必要があった。

(3) 舟葬について

さて、古墳と船の話がここまで及べば、舟葬についても触れておく必要がある。なぜなら、舟葬については、その存否を中心に長く議論が続いてきたからである。⁽¹⁹⁾ここで、その詳細について触れる余裕はないが、議論を複雑にした原因は、古くは古墳時代に使用された棺・槨の実態についての理解が、新しくは人の死に係わる船には複数の性格をもつ船が存在することについての理解が、十

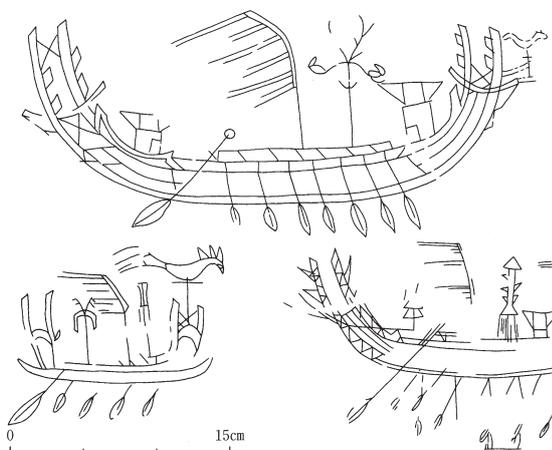


図8 奈良県西殿塚古墳出土埴輪のヘラ描きの船
[松本他2000]

分でなかったことによるかと考える。

そこで、上記のような理解を踏まえて、古墳時代の人の死に係わる船の性格を整理すると、つぎのようである。

第1は、死者の魂を乗せて他界へと運ぶ船

第2は、死者の遺体を入れて埋葬する棺としての船

第1の船は、観念としての船で、巢山古墳の船形木製品や船形埴輪やヘラ描きの船は、この観念に基づくものである。一方、第2の船は、千葉県大寺山洞穴（古墳中期～飛鳥）[千葉大学1994-9]などで発見された、実物の船を棺として用いた例であり、静岡県若王寺古墳群[藤枝市1983]（前期後半～中期）などで検出された、一方が尖り他方が直線的な形状をなす木棺痕跡などを船と認めた場合である。

死者は船に乗って他界へと赴くと考えするという意味では、両者を広義の舟葬ということはできるだろう。しかし、類似した観念が背景にあるとは言っても、両者には儀礼の筋書きや表現方法の上では大きな差異がある。第1のように、遺体を船に乗せて他界の擬えものである古墳へと運ぶのであれば、埋葬用の棺は船でなくともよいし、第2のように、船形の棺に遺体を入れて埋葬し他界へと送りだすのであれば、古墳は他界の擬えものでない方がよい。

広義の舟葬が実修される場合には、その筋書きや表現方法に習俗の差とも言うべきいくつかのバラエティがあったのであり、今は両者を厳密に区分して、丹念に時期的に地域的に識別していく必要がある。事実、畿内を中心とした主要な古墳では、船形の棺はほとんど認められず、第2の船は関東や東海などの一部の地域で見つっているにすぎないのである。

かつての後藤守一[後藤1935]らに対する小林行雄の批判[小林1944]は、棺・槨の実態が十分明らかでなかった時期の、第2の船に遺体を入れて埋葬し他界へと送りだすという狭義の舟葬⁽²⁰⁾の存否、言い換えれば棺の理解に関するものだったのである。

④……………他界と横穴式石室

では、このような他界観・古墳観は、埋葬施設として横穴式石室を用いるようになると、どのように変化したのであろう。

(1) 閉ざされた石室

畿内を中心とした地方では、横穴式石室は、中期後葉の若干例を除けば、後期前葉（須恵器TK23-47型式）に定着しはじめ、後期中葉に普及する。そして、有力な大型古墳では刳拔式や組合式の家形石棺が採用されるようになるが、その場合の石室や墳丘の築造と、石棺の配置や遺体の納棺の手順は、棺を羨道から持ちこむことができるかどうかで、大きく違ってくる。

組合式石棺や組合式木棺のように、棺を羨道から運びこめる場合は、石室構築の各段階に合わせて順次墳丘を築造し（注3の「同時進行型」に相当）、石室と墳丘の完成をまって棺が運びこまれ、その後に遺体を運びこんで納棺したと考えられる。古墳時代後期の棺も、基本的には「据えつける棺」だったからである。

しかし、大型の刳抜式石棺で、羨道から運びこむことができない場合は、石室や墳丘の完成以前に石棺を運びこんでおく必要があった。その場合、考えられる方法は二つある。一つは、石室完成後に遺体を運びこむ場合で、作業は、墓坑の掘削—石室の基礎工作—石棺身の配置—石室の構築・墳丘の築造—遺体の搬入・納棺—石棺蓋の配架と続く。ただ、この場合は、狭い石室内で重さ2、3トンの蓋をうまく配架できるかどうかが課題として残る。もう一つの方法は、石棺身の配置の段階で遺体の搬入・納棺を済ませておく方法で、一見あり得ない方法のようにみえるが、この手順は前・中期の竪穴式石槨の場合と基本的に同じである [和田 1995]。

いずれにしても、横穴式石室の採用によって大きく変わったことは、埋葬儀礼のなかで人々が墳丘の頂上に登ることが基本的になくなり、古墳の墳丘は「登らない墳丘」となったことである。そのことによって、他界に擬えられた墳丘の形骸化が進んだ可能性が高い。

また、墳丘の内部には、玄室というこれまでにない空間が出現した。そこで、その内部の利用方法を検討すると、主要なものは、つぎのようである。

- ① 棺を置く場
- ② 副葬品を置く場（鏡、玉類、武器・武具類、馬具類、農工具類など）
- ③ 食物供献の場（須恵器・土師器）
- ④ 追葬の場

そのうち、①と②は基本的に前・中期の竪穴式石槨の内部と同様で、副葬品の内容に実用的なもの、新来のものが増えたとはいえ、場の性格はあまり変わっていないと考える。一方、③の食物供献は、前代に墳頂で行われた食物供献と同じような性格の儀礼が石室内でも行われたものと理解したい。ただ、時には杯類のなかに魚の骨や貝殻が残っていることから、生の食物が供されたことがわかるが、その点は前代の墳頂の土製品を用いた儀礼とは異なっている。また、④は前・中期にみられた墳丘上への追葬が石室内に場所をかえたものと推測できる。いずれにしても、横穴式石室の採用によって「登らない墳丘」となったことが、玄室空間に食物供献と追葬の新たな場所を造りだしたのである。

すなわち、横穴式石室の採用によって新たな墓制が生みだされたとしても、その利用方法は基本的に前期以来の習慣の範囲内のことであったと推定される。

それをもっとも端的に物語っているのが棺の機能で、畿内系の家形石棺の発達を示すように、後期になっても、棺は「閉ざされた棺」だったのである。そこでは、死者は石棺内に密封されたままであり、玄室の空間は死者には開放されてはいなかったのである (図9) [和田 2003]。言い換えれば、畿内系の横穴式石室には、後述する九州系の石室のように、死者が棲まう空間であるという意識はほとんど認められないのである。ここでは、このような石室を、死者に対して「閉ざされた石室」と呼ぶ [和田 2008]。

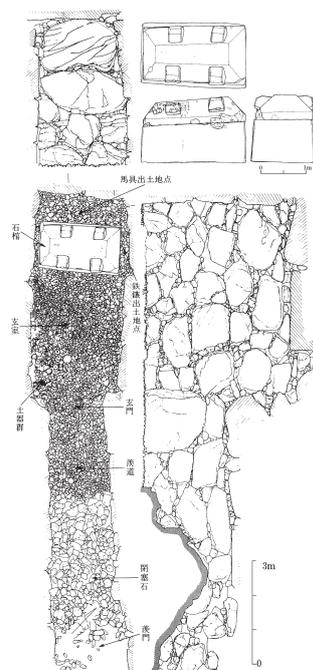


図9 奈良県藤ノ木古墳の横穴式石室と家形石棺 [奈良県 1989]

すなわち、畿内やその周辺では、古墳時代後期に入り、新たな埋葬施設として横穴式石室が採用されても、他界観に大きな変化はなく、石室は棺とともに遺体（形魄）を密封する装置として機能し（その意味では「柵」的と言える）、他界は、形骸化しつつあったとはいえ、依然として墳丘上に表現されていたのである。

(2) 開かれた石室

一方、古墳時代中期初頭に横穴式石室が伝わった九州の北・中部では、畿内やその周辺とは異なる現象が生じた。一部を除けば、初期段階から石室内では「閉ざされた棺」は用いられず、それに代わって、以下のような施設が発達したのである。

- A 1 類 仕切石型 玄室の床面を仕切石で区画したもの（四周を囲ったものもある）
- A 2 類 石障型 玄室の四周に石障を立て内部を仕切石で区画したもの
- A 3 類 石屋形型 玄室の奥壁沿いに石屋形を置くもの（蓋は時に屋根形をなす）
- A 4 類 石枕型 玄室の床面に石枕を置くもの（類例少なし）

それぞれ、出現時期や盛行した地域に差はあるが、ここでは、それらを「開かれた棺」A類と呼ぶ[和田2003・2007]。いずれも遺体を直接安置する「屍床」と総称すべきもので、そこには遺体を密封するという意識はなく、棺内の空間は玄室の空間とは一続きで一体のものとしてあった。このような横穴式石室を、遺体に対して「開かれた石室」と呼ぶが、その空間は、死者が、あるいは死者の魂が自由に遊動しうる空間であった(図10)。言い換えれば、九州系の横穴式石室をもつ古墳では、死者の魂が行くべき他界である墳丘とは別に、石室内に死者の空間が形成されたのである。

そして、この空間の内部においても、墳丘上の他界の家形埴輪と同じように、死者が棲まう施設として家が重要な役割を果たすことになった。

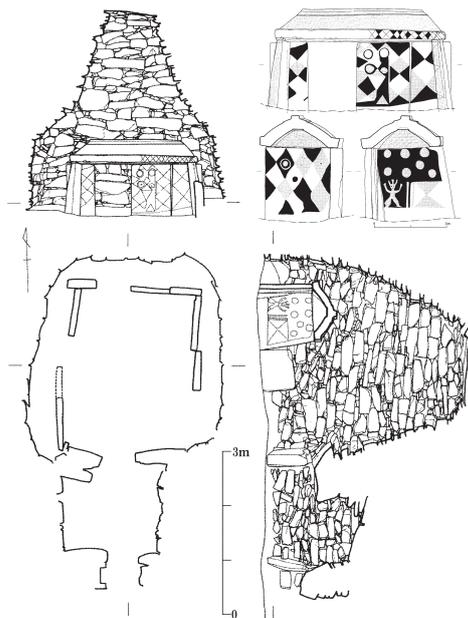


図10 熊本県チブサン古墳の横穴式石室と横穴式家形石棺(石屋形)[高木1984]

その場合、家を表現する方法には二通りのものがあった。一つは、石室に多い、玄室の天井が天空を表し、その下に家形の構造物（石屋形）が置かれる場合（I型）で、他は、横穴に多い、玄室そのものが家形である場合（II型）である。すなわち、ここでは新たに採用された横穴系の埋葬施設の玄室空間そのものが、死者の棲む空間、あるいは死者の棲む家と観念されたものと推測されるのである。他方でいまだ埴輪や石人・石馬を配した墳丘上の他界が存在することを考えれば、これらの場合は、二重の他界、あるいは入れ子の他界と言えるだろう。その場合、後述の黄泉国訪問譚などを考慮すれば、墳丘上のものが他界の擬えものとして形骸化しつつあったのに対し、「開かれた石室」内部の他界は、他界そのものと観念されていた可能性が高い。

かつて、小林行雄が、畿内と九州の家形石棺を比較

し、家の意識が少なく単なる箱へと変化する畿内系の家形石棺に対し、家の意識を強く保持しつづける九州系の家形石棺と解釈した [小林 1951] が、その原因は、ここにあったのである。

中国の埋葬施設が槨から室へと変化する過程において、埋葬施設観が、単に遺体を納め鬼魂（形魄）が宿るだけのものから、室が重視され、死者の棲む家あるいは空間へと変換することが指摘されているが [黄 1998・1999・伊藤 1998]、墳丘上のことを別にすれば、畿内系の石室は前・中期の槨の伝統を強く受け継いだのに対し、九州系の石室は、当時、中国において石室が果たした役割の影響を強く受けているといえることができる。

そして、九州系の「開かれた石室」の系譜をたどれば、それは、東アジアでは、中国の北朝系の石棺床や横口式家形石棺をもつ埴室墓や土洞墓に行き着くのである [和田 2007]。

また、横穴式石室の世界としては、『古事記』に載る伊邪那岐命の黄泉国訪問譚の舞台が石室かどうか議論になるが、その舞台装置にもっとも適合的な石室は、決して畿内系の石室ではなく、九州系の「開かれた棺」A3類の組合平入り横口式家形石棺（これが伊邪那美命が棲み出入りする「殿」にあたる）を配したI型の横穴式石室であると考えられる [和田 2008] ことも、以上の話と合致する。他界に「黄泉国」という名を付けるとすれば、九州系の「開かれた石室」の世界にこそ相応しい。

なお、九州系の横穴式石室の他界観を考えるには、九州を中心に発達した装飾壁画の検討が不可欠であるが、装飾壁画はここで述べた「開かれた石室」の壁面に描かれたものに他ならない。それについては、ここでの作業を前提に別に検討を加える予定である。

おわりに

ここでは、古墳という遺跡の長所を活かし、古墳という場で行われた人々の行為をできるだけ具体的に復元し、その場その場における遺構や遺物の内容や機能や用い方を丹念に検討するといった作業を踏まえ、前・中期の古墳を、遺体を密封する墓としての性格と、遺体の埋納が終わってから葺石を施し埴輪を樹立して仕上げられた「他界の擬えもの」としての性格の、二面から捉えようと試みた。古墳を構成する諸要素は、このとらえ方に適合的である。

この段階では、人は死ぬと魂（魂気）は船に乗って他界へと赴くと考えられていたが、遺体（形魄）は棺・槨のなかに密封され、そこでは生前のような日常的な生活を送るとは考えられてはいなかった。

奈良県粟山古墳の周濠で発見された実物大の荘厳な船は、実際の葬送の折に、魂が船にのって他界へと旅立つ様子を現実の世界で再現するためのもので、遺体を乗せた船は「他界の擬えもの」である古墳へと牽引されていったものと思われる。

古墳に表現された他界は、徐々にその内容を整え、前期後葉から中期前葉に一つの様式的な完成を見せる。その内容は、船に乗って他界へと至った死者の魂は、くびれ部の出入口（造出）で船を降り（船形埴輪）、襖をし（導水施設のある家形埴輪を包む冪形埴輪）、岩山の斜面を登って頂上に至る。頂上には防御堅固で威儀を正した居館があり、死者はそこに棲むことになるが、そこは飲食物に満ち、日々新たな山海の食物が供えられている、といったものではなかったかと推定する。葺

石や埴輪（木の埴輪を含む）や食物形土製品は、それを演出するための舞台装置や道具立てであった。そして、中期中・後葉には、これに人物埴輪や動物埴輪が加わったが、いずれも、首長が他界においても首長でありつづけるのに必要なものなのであった。

注目すべきは、この首長の魂がいくべき他界の表現に形や規模のうえで差があることである。古墳の秩序はこの差を基本に成立し、そこにヤマト王権内における首長の政治的身分秩序が反映していると考えているが、この秩序は他界における首長の秩序をも反映していた可能性がある。王権による政治的統合の進展過程は、首長霊の世界の統合とも不可分な関係にあったのである。

しかし、横穴式石室が埋葬施設として採用されるようになると、石室の性格により、地域差が顕在化する。

後期に横穴式石室が定着し普及した畿内やその周辺では、横穴式石室は「閉ざされた棺」を納める「閉ざされた石室」で、遺体は、前代と変わらず、棺内に密封され、玄室内は死者の空間とはならなかった。墳丘に人が登らなくなり、舞台装置や道具立ては形骸化しだすとはいえ、古墳は一つの「他界の擬えもの」として存続し、石室内には前代の墳丘上で行われた食物供献や追葬が加わったが、密封を基本とする「槨」的な性格はそのまま受け継がれた。

一方、中期初頭に横穴式石室が採用されはじめる九州北・中部では、横穴式石室は「開かれた棺」を備える「開かれた石室」で、そこは死者が死後においても生前と同じような日常生活を続ける空間となった。その場合、墳頂の家形埴輪とは別に死者の棲む家が用意されたが、それには、横穴式石室に多い、玄室の天井が天空を表し、その中に家形の施設（石屋形）を配する場合（Ⅰ型）と、横穴に多い、玄室空間そのものを死者の宿る家とする場合（Ⅱ型）とがあった。横穴式石室との関係で議論される『古事記』の伊邪那岐尊の黄泉国訪問譚で伊邪那美尊が棲む世界は、畿内系の横穴式石室ではなく、前者（Ⅰ型）のような石室空間であったと推定される。

したがって、ここでは、埴輪や石人・石馬が立てられた墳丘上の他界と、横穴式石室内部の他界の、二つの他界が入れ子状態で共存することになるが、前者が形骸化していくのに対し、後者は他界そのものと観念されるようになった可能性が高い。「黄泉国」とはこの世界である。

なお、「開かれた棺」・「開かれた石室」の系譜を追うと、東アジアでは、その源流を中国の北朝や高句麗の一部の埋葬施設に求めることができる。

以上、個々の検討ではいまだ不十分なところを残すが、筆者の基本的な古墳観を概述してきた。列島における古墳を構成する諸要素やその背景にある他界観の内容と変遷に関しては、強弱・濃淡の差はあるものの、何らかの形で中国の影響を受けている。古墳の発掘方法をさらに磨き、古墳への理解を深めながら、東アジア諸地域の墳丘墓との比較研究をより一層進めなければならない。

なお、本稿を草するにあたり、広瀬和雄氏を初めとする国立歴史民俗博物館の共同研究者の方々、古墳時代研究会の方々、ならびに車崎正彦・劉振東・下垣仁志・福山博章の各氏に厚くお礼申し上げます。

註

(1)——ここではモガリについては議論しないが、田中良之の「殯は墳墓域ではなく、居住域もしくは他の『歌舞』が可能な開けた場所において行われ、殯屋を建て、通常は一週間以上十数日で埋葬された可能性が高く、被葬者の階層や社会的機能に応じて、墳墓や儀礼の規模と長さが異なると考えられる」[田中 2004]との指摘を、妥当なものとして受けとめている。

(2)——政治的な選地の例としては、『日本書紀』仁徳 67 年に、大王自らが「河内の石津原に幸して、陵地を定めたまふ」とあり、同雄略 9 年には、紀小弓の妻の采女大海が「葬るところを知らず。願わくば良き地を占めたまへ」と、大伴守屋大連を通じて雄略の意向を伺い、その結果として視葬者（はぶりのつかさ）の「土師連小鳥をして、冢墓を田身輪邑に作りて葬さしむ」とあるのが興味深い。ここから、大王自らが生前に墓域の選定にあたった場合や、地域首長の墓域の選定に大王が関わっていた場合があったことを知る。また、地域首長の古墳づくりに「視葬者」が派遣されているのも見逃せない。

(3)——墳丘の築造と埋葬施設の構築の前後関係でもって「墳丘先行型」・「墳丘後行型」とする概念は[吉井 2001]による。その場合、横穴式石室の構築と墳丘の築造がほぼ同時に行われる列島の後期古墳の場合は「同時進行型」となる。列島の古墳には「墳丘後行型」は極めて少ない。[和田 1989]では、墳丘の構築と埋葬施設の構築と埋葬の前後関係を中心に「墳丘先行型」・「同時進行型」・「埋葬後行型」としていたが、三者の前後関係で捉えたと話が複雑になるため、ここではわかりやすい概念を使った。なお、「墳丘先行型」の墳丘墓は半島にもあり、[吉井 2003]では半島における 4 世紀から 7 世紀にかけての先行型と後行型の地域差が、3 時期に分けて論じられている。

(4)——[近藤 2000]は、前方部の隅角が出入口で、稜線を登ったと考える。

(5)——この墓坑の作業用の道がいつ埋めもどされたかは、正確にはわかっていない。墓坑内の作業の比較的早い段階には埋めもどされている。

(6)——奈良県下池山古墳では、石槨の被覆粘土のなかに「赤、黒などに染め分けた麻布」が敷きこまれていた[岡林 1997]。なお、この古墳では、墓坑北西隅の石槨裏込め中から大型内行花文鏡を納めた小石槨が発見されている。

(7)——四周を閉ざした棺のすべてが「閉ざされた棺」

であるとは考えていない。地域や時代の文化的脈絡によっては、そうでない棺も考えられる。

(8)——後述するように、他界において首長の霊は首長居館を表した家形埴輪群に宿っていると想定されていたことからすれば、首長は死しても首長でありつづけると考えられていたと思われる。なお、首長の葬送儀礼のなかで、副葬品類は首長の力を示すものとして人々に開示された可能性が高い。

(9)——鳥取県倉吉市の小さな古墳の例であるが、葺石の一部が、平坦面いっばいに掘られた墓坑の埋土の上に被さっていた例がある（家根祥多氏ご教示）。

(10)——後藤守一は、群馬県赤堀茶臼山古墳例から、家形埴輪群を当時の一豪族の屋敷を表していると考え、死者の来世の家として墓上に建てられたものとした[後藤 1933]。なお、そこでは、同じく中国の「石人・石馬に原由を索むべきでなく、寧ろ明器に多くの類似を持つもの」としたが、藤澤一夫は、同古墳の家形埴輪配列の復元案を作成し、中国山西省の唐墓出土の家形明器との比較から、その源流を中国に求めた[野上 1976]。後述のごとく、古墳が他界の擬えものであるなら、そこに置かれた埴輪類は十分明器と比較することができる。

(11)——[和田 1997]では、「造出における儀礼は、後円部頂上の平坦面において、たぶん埴輪の樹立後に行われた墓上儀礼が墳丘の出入口に場所を変えて行われたものと推察される」としたが、両者の関係は未だ明らかでない。

(12)——[車崎 2000]は、蓬莱山とは明記していないが、前方後円墳を壺形と考え、死者のクニ（国）、オオヤケ（大宅・大家）、ムロ（室）のシンボリズムと捉える。興味深い説だが、前・中期の埋葬施設をムロ（室）とする考えには賛成できない。

なお、[高橋 1996・1999]も古墳舞台説の一種であるが、墳丘における儀礼を祈りと捉え、「これは魂が他界へ無事に移るための祈りの表現であり、古墳自身あるいは埴輪自身も他界への装置という側面が強いのではないか」[高橋 1999]、あるいは「死者が神仙界へ導かれていくための、通過行為として認識されていた可能性が高い」[高橋 1996]とする。墳頂における食物形土製品を伴う儀礼と、造出の儀礼と、そこに出現すると考えた人物埴輪を結ぶことから発想されたものである。筆者も類似の観点からではあるが、人物埴輪を「首長への永遠の奉仕」と捉えたことがある[国立歴博 1999]。

(13)——古墳時代前・中期には壺肉分離を認めず、壺の存在と世界観念の形成は横穴式石室の伝来に伴うとする説もある〔広瀬2006〕。

(14)——中国の靈魂観にも時期的な変遷があり、それは埋葬施設のあり方にも反映している〔伊藤1998, 黄1998・1999〕

(15)——「柩を載せる船」との解説は、〔倉野1958〕の解説をそのまま引用したためと思われる。文中には「喪船を一つ具へて、御子を其の喪船に載せて」とあり、棺の記述はない。

(16)——宝塚1号墳では、他に1例の船形埴輪の出土がある。同じ造出東側の円筒埴輪内に二次的に入った状態でみつかったものと、その周辺部のものである。

(17)——〔辰巳1999b〕では、高廻り2号墳の船形埴輪を、「此界と他界を結界する意味をもつ周濠の底に置かれた船こそ、被葬者の靈魂を他界(古墳)へと導く乗物であることをよく物語っている」としている。

(18)——船形の模造品には木製品も存在した可能性がある〔辰巳2002〕。

(19)——舟葬の存否については、かつては後藤守一〔後藤1935〕や小林行雄〔小林1944〕によって議論された

が、最近では、磯部武男〔磯部1983・1989〕、岡本東三〔岡本2000〕、辰巳和弘〔辰巳1996・1999a〕などによって、肯定的に捉える論考が提出されている。

(20)——この時期の議論では、家葬も、舟葬と同じように、狭義には家形の棺に埋葬することをさしている〔後藤1935〕。その場合にも同様の注意が必要で、同じ死者の魂の棲む家といっても、墳丘上の家形埴輪と、横穴式石室内の横穴式家形石棺、あるいは家形の石室や横穴とは区別する必要がある。

(21)——九州中心に広がった横穴も同様に理解できる。

(22)——「開かれた棺」には、本文中に述べたA類とは別に、福岡県石人山古墳(中期中葉)に代表されるような、狭い横穴式石室に妻入りの横穴式家形石棺を置くB類があり、後には熊本県江田船山古墳(後期前葉)のように、妻入り横穴式家形石棺が直葬され、その前に羨道が付くものとなる。「閉ざされた棺」B類は、Ⅱ型の石室や横穴と密接な関係にある。

(23)——『日本書紀』では、黄泉国訪問譚は本文からはずされ、一書のなかで扱われているが、解説的要素が強い。『古事記』の話の方がより本来的で、内容の検討は『記』を基本にすべきであろう。

参考文献

- 石原道博1951『新訂 魏志倭人伝他三篇』(『中国正史日本伝(1)』) 岩波書店
磯部武男1983「古代日本の舟葬について(上)」『信濃』第35巻第12号
磯部武男1989「舟葬考—古墳時代の特殊葬法をめぐって—」『藤枝市郷土博物館年報・紀要』No.1
伊藤清司1998『死者の棲む楽園—古代中国の死生観—』(『角川選書』289) 角川書店
井上義光2006「特別史跡栗山古墳—第5・6次—」『大和を掘る』24, 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館広陵町教育委員会
王 巍2001「中日古代墳丘墓の比較研究」『東アジアと日本の考古学』I (後藤直・茂木雅博編) 同成社
大塚初重1994「前方後円墳起源論」明治大学考古学博物館編『論争と考古学』(『市民の考古学』1) 名著出版
大塚初重・小林三郎1971「茨城県舟塚古墳」『考古学集刊』第4巻第4号, 東京考古学会
大場磐雄1950「考古学上から見た上代人の他界観念」『宗教研究』第123号 (『大場磐雄著作集』第3巻, 雄山閣出版, 1977年所収)
岡林孝作1997「竪穴式石槨」『下池山古墳・中山大塚古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編, 学生社
岡本健一1999・2000「蓬莱山と扶桑樹への憧れ」上・下『人間文化研究』第1, 2号, 京都学園大学
岡本東三2000「舟葬説再論—「死者の舟」の表象—」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』
小野山節他1993「石山古墳」『紫金山古墳と石山古墳』(『京都大学文学部博物館図録』第6冊) 京都大学文学部考古学研究室編
奈良県立橿原考古学研究所編1989『斑鳩・藤ノ木古墳概報』吉川弘文館
河上邦彦2008「栗山古墳出土の船形木製品の復元と意義」『橿原考古学研究所論集』第15, 八木書房
川西宏幸1999『古墳時代の比較考古学—日本考古学の未来像を求めて—』同成社
京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団(近藤喬一・都出比呂志)1971「京都向日丘陵の前期古墳の調査」『史林』第54巻第6号
車崎正彦2000「古墳祭祀と祖霊観念」『考古学研究』第47巻第2号

- 車崎正彦 2005「古墳時代の支配と従属」岡内三真・菊池徹夫編『社会考古学の試み』同成社
- 倉野憲司校注 1958「古事記」『古事記・祝詞』（『日本古典文学大系』1）岩波書店
- 黄 曉芬 1998「中国における横穴墓室の成立」『考古学雑誌』第83巻第4号
- 黄 曉芬 1999「墓制にみる古代中国の他界観」『他界伝説』（『大阪府立弥生文化博物館図録』19）
- 国立歴史民俗博物館編 1999『はにわ人は語る』山川出版社
- 後藤守一 1933「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」（『皇室博物館学報』第6）
- 後藤守一 1935「西都原発掘の埴輪舟」『考古学雑誌』第25巻第8号・第9号
- 小浜 成 2005「埴輪による儀礼の場の変遷過程と王権」『王権と儀礼—埴輪群像の世界』（『大阪府近つ飛鳥博物館図録』39）
- 小林行雄 1944「舟葬説批判」『西宮』第3号（『古墳文化論考』平凡社、1976年所収）
- 小林行雄 1951「家形石棺」『古代学研究』第4・5号、古代学研究会（『古墳文化論考』平凡社、1976年所収）
- 近藤義郎 1977a「古墳以前の墳丘墓—楯築遺跡をめぐって—」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号（史学篇）
- 近藤義郎 1977b「前方後円墳の成立」『考古論集』（『慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』）松崎寿和先生退官記念事業会
- 近藤義郎 2000『前方後円墳観察への招待』青木書店
- 近藤義郎編集代表 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- 佐藤晃一 1992『作山1号墳からのメッセージ』（『加悦町文化財調査報告書』第18集）
- 末永雅雄・島田暁・森浩一 1954『和泉黄金塚古墳』（『日本考古学報告』第5冊）綜藝舎
- 高木正文編 1984『熊本県装飾古墳総合調査報告』（『熊本県文化財調査報告』第68集）
- 高橋克壽 1996『埴輪の世紀』（『古代発掘』第9巻）講談社
- 高橋克壽 1999「人物埴輪の出現とその意味」『はにわ人は語る』国立歴史民俗博物館編、山川出版社
- 高橋克壽 2005「東方外区の埴輪」『石山古墳』（『第24回三重県埋蔵文化財展』）三重県埋蔵文化財センター
- 高橋 工 1991「高廻り2号（長原170）墳・古墳の形状と遺物の出土状況」『長原遺跡発掘調査報告』IV、大阪市文化財協会
- 辰巳和弘 1996『「黄泉国」の考古学』講談社現代新書1330
- 辰巳和弘 1999a「舟葬再論—東殿塚古墳出土の船画をめぐって—」森浩一・松藤和人編『考古学に学ぶ』（『同志社大学考古学シリーズ』Ⅶ）
- 辰巳和弘 1999b『風土記の考古学』白水社
- 辰巳和弘 2002『古墳の思想—象徴のアルケオロジー』白水社
- 田中良久 2004「殯再考」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会
- 千葉大学文学部考古学研究室 1994-9『大寺山洞穴第1～7次発掘調査概報』
- 都出比呂志 1979「古墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号、考古学研究会
- 都出比呂志 1989「古墳が造られた時代」都出比呂志編『古代史復元』第6巻（『古墳時代の王と民衆』講談社
- 寺沢薫編 1989『嚮向石塚古墳範囲確認調査（第4次）概報』桜井市教育委員会
- 徳田誠志・清喜裕二 2000「倭迹迹日百襲姫命大市墓被害木処理事業（復旧）箇所調査」『書陵部紀要』第51号、宮内庁書陵部
- 中井正幸他 2003『史跡昼飯大塚古墳』（『大垣市埋蔵文化財調査報告書』第12集）大垣市教育委員会
- 中村一郎・笠野毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1989『斑鳩・藤ノ木古墳概報』吉川弘文館
- 野上文助 1976「埴輪生産をめぐる諸問題」『考古学雑誌』第61巻第3号
- 樋口隆康 1998『昭28年椿井大塚山古墳発掘調査報告』（『京都府山城町埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集）
- 菱田哲郎他 1997『行者塚古墳発掘調査概報』（『加古川市文化財調査報告書』15）
- 広瀬和雄 2006「古代人の心性を探る—弥生・古墳時代の首長墓からのアプローチ—」『日本人の心性を探る』（『歴史研究の最前線』Vol. 6、広瀬和雄編）総研大日本史研究専攻・国立歴史民俗博物館
- 福田 昭他 2001『松阪宝塚1号墳調査概報』学生社
- 藤枝市教育委員会 1983『若王寺・釣瓶落古墳群』（『志太広域都市計画蓮華寺池公園事業に伴う文化財調査概要』）
- 松阪市・松阪市教育委員会 2003『全国の船形埴輪』
- 松本洋明他 2000『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市教育委員会
- 三品彰英 1973『古代祭政と穀霊信仰』（『三品彰英著作集』第5巻）平凡社

-
- 水野正好 1971 「埴輪芸能論」『古代の日本』第2巻（竹内理三編）角川書店
水野正好 1974 「埴輪体系の把握」『古代史発掘』第7巻（村井富雄編）講談社
宮原晋一 1999 「竪穴式石室の副葬品出土状況」『黒塚古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編，学生社
茂木雅博 1988 「前方後円墳の起源」『論争・学説日本の考古学』第5巻（古墳時代編）雄山閣出版
森 浩一 1950 「口絵解説」『古代学研究』第3号，古代学研究会
吉井秀夫 2001 「百済の墳墓」『東アジアと日本の考古学』I（後藤直・茂木雅博編）同成社
吉井秀夫 2003 「朝鮮三国時代における墳墓の構築過程について」『古代日韓交流の考古学的研究—墓制の比較研究—』
（『科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書』代表・和田晴吾）
吉村公男 1993 『ナガレ山古墳発掘調査概要』奈良県河合町教育委員会
和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古代史復元』第6巻（『古墳時代の王と民衆』都出比呂志編）講談社
和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀—『据えつける棺』と『持ちこぶ棺』—」『立命館文学』第542号，立命館大学人文
学会
和田晴吾 1997 「墓坑と墳丘の出入口—古墳祭祀の復元と発掘調査—」『立命館大学考古学論集』I，同刊行会
和田晴吾 2003 「棺と古墳祭祀(2)—『閉ざされた棺』と『開かれた棺』—」『立命館大学考古学論集』III，同刊行会
和田晴吾 2004 「古墳文化論」『日本史講座』第1巻（歴史学研究会・日本史研究会編）東京大学出版会
和田晴吾 2007 「東アジアの『開かれた棺』」『渡来遺物からみた古代日韓交流の考古学的研究』（平成15～17年度科
学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書・代表・和田晴吾）
和田晴吾 2008 「黄泉国と横穴式石室」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

（立命館大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2008年9月30日受理，2009年1月27日審査終了）

The Concept of the Other World in Kofun

WADA Seigo

This paper attempts to gain an understanding of the nature of kofun from the Early and Middle Kofun periods as tombs that sealed off bodies and as “pseudo other worlds” by reconstructing the behavior of people inside tombs and through an examination of ruins and artifacts.

At this time, it was believed that when a person died the soul boarded a boat and traveled to the other world. The body was sealed inside a coffin and *kaku* (outer casing) within which it was believed it did not lead a life comparable to when the deceased had been alive. The boat discovered inside the Suyama Kofun in Nara Prefecture was for reenacting in the real world the soul’s journey to the other world during the funeral.

When the soul of the deceased had arrived at the other world by boat, it disembarked from the boat at the opening of the tomb (boat-shaped *haniwa*), performed a purification ritual (fence-shaped *haniwa*) and then lay in state in a dignified residence with the solid protection afforded by the top of the rocky hill it had climbed. Here, there was an abundance of food and drink and offerings of new food were made daily. The *fukiishi* (stone buttress), *haniwa* and food made of clay shapes set the scene for staging the other world. *Haniwa* figures of people and animals were added in the middle and later stages of the Middle Kofun period.

However, once horizontal stone chambers came into use, regional differences began to appear. In Kinai where stone chambers were widely adopted in Late Kofun, the stone chamber was a “closed stone chamber” that housed a “closed coffin”. As such, the body was sealed inside the coffin as it had been in the previous period and the inside of the dark chamber did not become the space of the deceased. Although people stopped climbing to the top of the mound and setting the scene for staging the other world became a mere formality, kofun continued to be “pseudo other worlds” and the stone chamber inherited the function of the *kaku*.

But in northern and central Kyushu where stone chambers were adopted in Middle Kofun, stone chambers were “open stone chambers” that housed “open coffins”, and as such they were spaces where the deceased continued to lead the same sort of life as they had while alive. This required a house for the deceased to live in addition to house-shaped *haniwa*. In some cases the ceiling of the dark chamber represented the heavens and a house-like structure was put inside the

chamber. In other cases the space of the dark chamber itself was the house where the deceased lived. The tale of the visit to Yominokuni in the *Kojiki* falls into the former category. Here, the other world above the mound and the other world inside the stone chamber coexist as two other worlds of different nature, one nestled inside the other. Genealogies of this sort of coffin and stone chamber can be found in China's Northern Dynasties and in some parts of Koguryo.

Key words: kofun, the other world, boat, vertical burial chamber, horizontal stone chamber, the tale of the visit to Yominokuni